

羽ばたけアジアの雁

2010年3月22日 IMFダイレクト

アヌープ・シン

飛雁の列のように、アジアの国々が経済的離陸を果たし、新興国あるいは先進国へと次々に変貌を遂げる様子は、渡り鳥が隊を組んで空を飛ぶ姿に喩えられてきました。この「雁行形態論」と呼ばれるモデルが正しいならば、今さらに多くのアジアの雁が、経済的に発展した国々への仲間入りをすべく離陸の順番を待っている状態だといえるでしょう。

「雁行形態論」は、東アジアの産業発展の形態について論じたもので、日本の経済学者の赤松要が1930年代に提唱しました。同氏のモデルによると、この飛雁の列の先頭を切るのは日本でした。二列目には韓国、台湾、シンガポール、香港の新興工業国・地域が続き、その背後には、インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイなどのASEAN諸国が続きました。そして最近になって、中国とインドがこれに加わっています。

「先頭の雁」は、比較優位性を失うと、労働集約的な生産分野から離れ、資本集約的な産業へと移行します。一方、労働集約的な産業は後列にいる国々へと移転します。簡単な例として繊維産業を挙げると、日本は、労働コストの上昇に伴いこの産業から撤退しました。その後、それを引き継いだ第二列の国、つまり韓国と台湾もこの産業から離れています。

このモデルに基づくと、前列にいる雁が隣国と交易や投資を行うにつれ、これら後列にいる国々は次の成長の推進力として飛び立つこととなります。

新しい成長の原動力が次々と登場することによる恩恵は、アジアにとどまりません。貿易や投資は各国間をつなぎ、アジアの域内統合も進み、さらに南北間の経済的結びつきに繋がるなど、その恩恵はさらに広がっていきます。

赤松のモデルは日本では有名ですが、欧米ではほとんど知られていません。これは恐らく、戦時中このモデルが帝国主義の精神的支柱として利用されたからだと思われます。

しかし、このモデルの支持者は、現在の経済成長のパターンを理由にその正当性を主張するかもしれませんが、2008年の深刻な世界景気後退にも拘わらず、2009年の大半において総じてアジアは世界の他の地域をしのぐ成長を記録し、現在では世界的な回復の先導役をつとめています。この傾向は今年から来年にかけて続く見込みで、国際通貨基金(IMF)ではアジアの成長率を年約7%と予測しています。

力強い回復

こうした力強い回復の要因は多数ありますが、その主なものとして、中国の大胆な景気刺激策、中国の垂直統合型の生産形態や中国・インドの天然資源や資本財への需要などが挙げることができます。これらはどれもドミノ効果によって地域全体、そして世界に広がりました。

雁行形態説に従うならば、次にどの雁が羽ばたくか予測することができます。カンボジア、ラオス、ネパールなどの国々は経済的離陸に向け準備を着々と整えています。これらの国々の1人当たりの国民所得の水準はまだ低いかもしれませんが、彼らは次の新興市場国であり新たに巨大な中流階級市場を形成するでしょう。これらの国々は巨大な潜在力を秘めているのです。

むろん、ただ潜在力があることと、それを実現することには格段の差があります。各国は、健全なマクロ経済政策を実施し、堅固な金融部門を育成するなど準備を周到に進めることで、自国の潜在力を最大限に発揮しなければなりません。ただし、それだけを進めれば十分というわけではありません。それらは単なる前提条件に過ぎないのです。IMFでの我々の仕事は、離陸の準備態勢を整える国々を力づけることです。そのために、IMFは、アジアの途上国を対象とした会議を3月22日にベトナムのハノイで開催します。

この会議は、アジアの途上国に与えた世界金融危機の影響を検証すると共に、これらの国々を開発の次の段階へと押し上げるための条件を特定することを狙ったものです。

IMF のミヤザキ マサト対ベトナム代表団長は、ポッドキャストの中でこう述べています。「これらの国は疑いなく、我々が何もしなくても(開発の)はしごを上っていこう。しかし、我々IMF は、適切な支援と助言を提供したいと思っており、その準備はできている」

IMF では、次の雁が羽ばたくことを大いに期待しています。